

立教大学学術推進特別重点資金(立教 S F R)

大学院学生研究

2019年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	英米文学	専攻
研究代表者 (2020年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年・学生番号			氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年 (学生番号: 19PB002C)			諸岡友真 印	
指導教員	所属部局・職			氏名	
	文学部・教授			新田啓子 印	
自然・人文・社会の別	自然	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> 人文	<input type="checkbox"/>	社会
個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人		<input type="checkbox"/> 共同		
研究課題	James Baldwin, <i>Tell Me How Long the Train's Been Gone</i> の黒人音楽表象における身体感覚				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2020年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年			氏名	
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程1年			諸岡友真	
研究期間	2019 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、20世紀最大のアメリカ黒人作家 James Baldwin の長編小説 *Tell Me How Long the Train's Been Gone* (1968) を素材とし、白人と黒人両方の構築する「黒人像」が、語り手である黒人男性 Leo Proudhammer の記憶を抑圧すると共に、彼と白人女性 Barbara King との愛情関係の障壁となっていることの意味を探求したものである。ある集団の差別的な像が人心に与える影響の分析に加え、本研究は、記憶の抑圧への抵抗の可能性を探った。特に、登場人物の記憶に共鳴する黒人音楽の歌詞が、語り手の身体感覚に影響し、主人公との関係性を変化させている点に着目し、言語化困難な記憶を補完する可能性を示唆すると共に、それが公民権運動という社会的文脈においてどのような意義を持つのかを探った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 黒人音楽 } { 記憶 } { 身体感覚 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

アメリカ黒人作家 James Baldwin (1924-1987) は、公民権運動を主導したことで知られる。エッセイ *The Fire Next Time* (1963) 以降に出版された後期作品は、作家の政治への肩入れから、文学的価値の上では劣化したと批判される傾向にある。特に、俳優として成功した黒人男性 Leo Proudhammer を語り手に据えた小説 *Tell Me How Long the Train's Been Gone* (以下、*Train*) は、Baldwin 作品中、最も過小評価されてきた。同小説の低評価は、*The Godfather* (1969) の著者、Mario Puzo の批判に端を発している。大衆作家の Puzo は、*Train* を「抗議小説」とみなし、同小説の一人称の語り手を厳しく批判した。いわく、『私』語りには不適切なキャラクターとは、退屈な人間か、議論好きのモラリストである。Baldwin の小説の主人公は、その両方なのだ。公民権運動の只中に執筆された *Train* を性急に「抗議小説」の系譜へ位置づける Puzo の批判は、しかし、同テキストの一人称の語り手が前景化する Leo の不完全な記憶を見落としている。記憶の曖昧さは、Baldwin の最後の小説 *Just Above My Head* (1979) や、最後のエッセイ *The Evidence of Things Not Seen* (1985) の中でも扱われており、後期作品を理解するうえで非常に重要なテーマとなっている。それにも拘わらず、先行研究 (Lynn Orilla Scott's *James Baldwin's Later Fiction* (2002); David A. Gerstner's *Queer Pollen* (2011); Ernest L. Gibson III's *Salvific Manhood* (2019)) は、不完全な Leo の記憶に関して沈黙を保ってきた。

これを受けて本研究は、Leo の記憶の曖昧さの原因と、それが対人関係へ与える悪影響の分析を行った。さらに Baldwin が、歪曲された記憶という問題に対して、いかなる回答を与えているのかを明らかにするため、テキスト内に描かれる黒人音楽の歌詞とメロディーに着目し、それが Leo の記憶を補完している可能性を探求した。*Train* は、劇の最中に心臓発作に襲われた Leo が、閉幕と共にステージで崩折れ、長年の恋人である南部白人女性 Barbara King の手を借りながら、搬送先の病院で 40 年に及ぶ人生を回顧する物語である。病院のベッドで想起される記憶には、兄 Caleb と Barbara, そして自衛のための武装を掲げたブラックパンサー党に類する思想を持つ黒人男性 Christopher Hall との過去が含まれている。また Leo の記憶は、黒人家族の世界から芸能界という白人中心主義的社会へ移動した彼が、白人の構築するステレオタイプの黒人役を演じさせられ、まさにその「黒人像」と同一化することで自己嫌悪を高めるとともに、白人への怒りを蓄積させ、憎悪に対抗するためのプライドをまとう過程をも克明に描き出す。このように、Leo の追憶が物語の推進力となっている一方、Caleb に関する記憶が曖昧である点も示されている。

Leo が思い出せなくなっていく記憶とは、南部から帰郷を果たした Caleb とハーレムの自宅で愛し合った過去である。ある日、冤罪によって突如逮捕された Caleb は、南部での 4 年間の強制労働を課される。服役期間を終えた Caleb は弟に、囚人監視人の白人男性 Martin Howell の屋敷の家内労働を行う、いわゆる House Slave としての日々を語る。Caleb のナラティブは明らかに奴隷体験記の語り直しとなっている。Leo は、南部での象徴的な奴隷制度によってトラウマを負った Caleb を愛し、そして最愛の兄から一人の人間として愛される経験をするのである。しかし、Leo が黒人家族のもとから演劇界という白人中心主義的世界へ参入して以降、Caleb と愛し合った記憶は抑圧され、曖昧化する。本研究では、この記憶の曖昧さの原因を探るため、俳優となった Leo が白人と黒人両方から演じさせられる「黒人像」の性質を詳らかにした。

Leo が白人から執拗に演じさせられるのは、白人観客に白い歯をむき出して笑う黒人給仕やウェイター、ポーター、バトラーの役である。これらはいずれも、白人に仕える House Slave 想起させる。白人観客は、幸せそうな黒人給仕の姿を見ることで、奴隷制度の悲惨な歴史の忘却を図るのである。いわば奴隷制度の忘却装置としての「黒人像」を演じることは、Caleb の南部体験を著しく歪めるため、Leo の記憶も共に歪む。特に House Slave のステレオタイプは、60 年代に *Train* を執筆した Baldwin にとって決して無視できない問題であった。それは、公民権指導者の Malcolm X が、1963 年のスピーチで、白人に迎合する黒人を現代の House Slave だと罵り、黒人もまた、白人主人の屋敷で幸せに暮らす House Slave というステレオタイプの生産に加担していたからだった。

他方で、有名俳優となった Leo は、同時に公民権運動のスポークスマンという公的役割を、黒人から期待されることになる。つまり黒人の代表として語ることも、また記憶を歪める要因となっている。黒人聴衆の面前で喋ることに對する Leo の苦悩には、公民権運動に参加した Baldwin 自身の体験が色濃く反映されている。Dwight A. McBride によれば、黒人知識人は、人種差別に抵抗するために、“authentic”な黒人共同体という言説を構築した。その際、異性愛の黒人男性が、コミュニティーの代表者として権威付けされ、黒人女性や性的マイノリティの黒人は周縁化された。McBride は、公民権運動期に討論やスピーチに参加した Baldwin もまた、人種の代表として、ヘテロセクシュアルな黒人男性を演じざるを得なかったと分析する。Caleb への同性愛的欲望を抱く Leo は、黒人の代表を演じざるを得なくなるが、この状況は Baldwin のジレンマを反復している。つまり、黒人の代表として語るために、Leo は自身のセクシュアリティを隠蔽する。一方では白人から奴隷制度の忘却装置としての「黒人像」を演じさせられ、他方では黒人から異性愛の黒人男性として振舞うように要請されることで、Leo の自意識は、House Slave として悲惨な目にあった Caleb と愛し合った過去を抑圧するに至るのである。

研究成果の概要 つづき

次に本研究が着目したのが、記憶の曖昧さの原因である「黒人像」が、Leo の対人関係に与える悪影響である。*Train* は、演劇界での活躍を夢見る Leo と Barbara の異人種間異性愛を描いていくが、Baldwin が強調するのは二人の関係が人種観念によって阻害される様相である。演劇業界という白人中心の世界において、Leo は白人の構築する「黒人像」に同化させられ、そのために自己嫌悪を抱えこみ、恋人の抱擁に自分は値しないと考えるようになる。Leo は、Barbara が有名女優となることを信じて疑わないのに対し、黒人である自分は俳優として成功できず、彼女の足手まといになることへの不安を募らせる。おのれの黒い肌を嫌悪し始めた Leo は、恋人の夢の障壁となることを恐れ、彼女を本気で愛することも、彼女からの愛情を受容することもできない。

しかし *Train* は、「黒人像」によって歪められる記憶の問題を描くと共に、それに対する抵抗の可能性を同時に示唆している。本研究ではその可能性を浮き彫りにするため、テキストに挿入されるフォークソング“Worried Man Blues”の歌詞とメロディーに着目した。*Train* における黒人音楽が、語り手の曖昧な記憶を補完するという着想は、James Campbell の *Just Above My Head* 論に依拠している。彼によれば、黒人音楽が「第二の声」として *Just Above My Head* の語り手 Hall Montana の不完全な記憶を補うと共に、人々の内面を反映している。いわく、「ジャズ、ブルース、そしてゴスペル音楽は、黒人の歴史が書かれた語彙を形成している。それは、白人の『歴史という悪夢』を出し抜く記憶の一形態である」。黒人の口承伝統から歴史を再考する試みとして *Just Above My Head* を解釈する Campbell は、奴隷制度の歴史や語り手の記憶をテーマに据える *Train* の読みの可能性を開いている。こうした先行研究を参考に、本研究では、“Worried Man Blues”の歌詞とメロディーに刻まれた黒人の歴史が、Leo の身体に Caleb との過去を想起させていることを明らかにしようとした。

“Worried Man Blues”が歌われるのは、Leo と Barbara が山頂に捨てられたホテルの中庭で一晩を過ごす場面である。先行きの見えない不安に押しつぶされそうになりながら、Leo は恋人に、「ブルースを歌うのはいつだって苦悩に満ちた奴だ。今だってそうさ。でもそれもそう長くはねえ」と“Worried Man Blues”のコーラス部分を歌いあげる。一見すると Barbara との関係性を歌っているように聞こえる。しかし、Leo があえて歌わなかった歌詞を調べてみると、“Worried Man Blues”が、忘却しかけていた Caleb との過去を歌っており、そのために Leo の不完全な記憶を補完している可能性が浮上した。

“Worried Man Blues”は、不当な逮捕によって生じた恋人との別離に対する男性の悲哀を歌っている。つまりこのフォークソングは、冤罪によって南部での強制労働を課された Caleb が、Leo から引き離された経験と一部分共鳴しているのだ。また William E. Lightfoot によれば、この歌は、黒人霊歌の“Do, Lord, Remember Me”のメロディーを受け継いでいる。黒人霊歌の中では、飢餓状態にあえぐ黒人奴隷が、神に救いを求める姿が歌われる。さらに「主よ、私を忘れないでください」というリフレイン部分は、彼らの苦痛を放置する神に対する怒りのこもった懇願を伝えている。つまり“Worried Man Blues”とは、Caleb の経験と共鳴すると共に、黒人奴隷の痛みの忘却に抵抗する“Do, Lord, Remember Me”という黒人霊歌の歴史的想念をも内包していることになる。奴隷制度の歴史と、その延長線上に位置する Caleb の体験と共鳴する“Worried Man Blues”は、Leo の身体に「熱」を引き起こすが、本研究は、彼の身体反応を、言語化困難な記憶の表象と位置付けた。

まず「熱」という身体反応に、“familiar”「慣れ親しんだ」という形容詞が付されていることに着目し、“family”を語源に持つ“familiar”が、Caleb と Leo との関係を暗示している可能性を示唆した。さらに「熱」が Leo の自意識に反して半自律的に働く意義も考察した。「黒人像」との同一化によって歪曲した Leo の自意識は、Caleb との過去を抑圧してきた。しかし「熱」は、そうした意識の操作に反して行為する。こうした方向で、さらに「熱」を帯びた Leo の身体が、Barbara との関係に変化を生じさせる原因を分析した。今まで、Leo と Barbara の愛の障壁は、主として自己嫌悪をもたらす「黒人像」であった。すでに確認したように、「黒人像」は、奴隷制度の歴史の捏造と関連した白人と黒人両方による構築物だ。しかし“Worried Man Blues”の歌詞とメロディーが、南部でトラウマを負った Caleb と愛し合った過去と共鳴することで、Leo の身体は「黒人像」に同化させられる以前の状態に遡行するかのよう描かれる。つまりこの歌詞は、抑圧されてきた Caleb との過去を Leo の身体に想起させることで、彼が「黒人像」を一時的に乗り越え、Barbara を愛することを可能にするのだ。Barbara との性行為の最中、Leo は、自分自身と「名状できない何か」へと接近していくように感じる。

本研究を終えるにあたり、なぜ Baldwin が 60 年代という革命の「政治の季節」に、黒人音楽が言語化困難な記憶を運ぶさまを描いたのかという、さらなる問いが導出された。公民権運動で、異性愛黒人男性が特権化される状況を肌で感じていた作家にとって、黒人さえが共犯する「黒人像」の捏造に、抵抗しうる創造は急務であったと思われる。よって Baldwin は、黒人音楽の内部に刻まれた歴史性にいち早く目をつけ、それが特定のイデオロギーへの従属を拒む記憶の媒体となるさまを、描いたのだと思われる。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

② 図書

諸岡友真「第 10 章 ジェンダー・セクシュアリティと文学」、三原芳秋、渡邊英理、鶴戸聡編著『クリティカル・ワード 文学理論』フィルムアート社、2020 年、pp. 231-47 (総ページ数 266pp. + vi)。

④ 学会発表

諸岡友真「*Tell Me How Long the Train's Been Gone* における自意識、記憶、黒人音楽」、2019 年度立教英米文学会、12 月 21 日、(於立教大学)。